

# トランジション

社会の「あたりまえ」を変える方法

ブックデザイン  
金澤浩二

図版  
田中えりな

## はじめに

「世の中なにかおかしいぞ」

「社会の仕組みから変えないといけないぞ」

こんなことを考えたことはないでしょうか？ 自分の生きる社会の在り方について、疑問を持ったり、改善点を見つげたりすることは、きつと多くの人が経験していると思います。

とはいえ、具体的になにをすればいいのかわからない。そもそも自分になにができるのかすらわからない……そんな方にぜひ知っていただきたいのが「トランジション」というキーワードです。これは、日本ではまだまだ、知られていない言葉だと思えます。しかしこれから、とても重要な単語となっていくのは間違いありません。

トランジションとは、「世の中の仕組みが変わる、仕組みを変える」ということです。

たとえば化石燃料を使い続けると今後、気候変動が悪化する可能性が高いので、化石燃料を使わない社会にしようとか世界中の国々、人々が努力しています。もっと身近なところでは、小学校のPTAの仕組みを変えようと努力している人たちがいます。

このように、いろいろな場面で仕組みを変えるときに、どうすればよいのか。この本では、その疑問にお答えします。

私の主な研究テーマは、交渉学・合意形成論というものです。これは一言でいえば、話し合いで問題を図る方法についての研究です。ここでいう「問題解決」は、ときに仕組みを変えることでもありますが、苦い思い出があります。

10年以上前の話ですが、合意形成の研究の一環として、ある離島で木質バイオマスをもっと利用してもらおうという取り組みがありました。化石燃料の代わりに木材を燃やして熱源にすることで、二酸化炭素の排出を減らすことができます。島のエネルギーの仕組みを変えようとしたわけですね。

私はまず、島の林業や製材などの関係者に集まっていたとき、合意形成のための話し合いの場を設けました。理論上、みんなが得をする仕組みだったので、話し合いで調整すれば、すぐに合意形成が実現するはずでした。しかし、結論から言えば、話し合いをしても、木質バイオマスの利用促進にはまったくつながりませんでした。話し合いの場では「いまとくに困っているわけではないのだから、わざわざ新しい仕組みを導入しなくてもいいんじゃないか」という意見が多数派になってしまったのです。

話し合いをしていた会場で、木質バイオマスを推進しようとしていた、とある参加者の方から、こんなことを言われました。

「大きな事業者が集まって話をして、なにも変わらないよ。むしろ、島の若い子たちに、未  
来の問題として関心を持ってもらおう場をつくったほうがよかったね」

これにはハッとさせられました。関係者が集まって合意形成を図れば世の中はよくなるはず、  
という自分のナイーブな思い込みのせいで、離島のみなさんに迷惑をかけてしまったのです。

これは困った、どうしたものか……と悩んでいたところ、当時勤務していた東京大学で、研究  
会の通訳の仕事を頼まれました。オランダから若手の研究者、ダーク・ローバック氏が来日し  
て、社会のトランジションを加速させる「トランジション・マネジメント」なるものについて  
1時間ほどの講義をしてくれるということでした。

その講義のなかで「合意形成ばかりでは、社会の仕組みは変わらないどころか、変化が阻害  
される！」というお話がありました。ちょうど、自分の合意形成の実証研究がうまくいかなか  
った直後だったので、まさに目からウロコが落ちる思いでした。

それからというもの、オランダのトランジション・マネジメントについて研究したり、実践  
してみたり、いろいろと試行錯誤してきました。本書はその経験をもとに、社会の仕組みを変  
えるトランジションとはいったいなんなのか、そしてトランジションを加速させるためになに

ができるのかを、できるだけわかりやすく整理しました。

前半では、なぜトランジションが必要なのか、地球温暖化と人口減少という代表的な問題を例にしてお話しします。産業革命から約200年を経た現代社会、そして戦後から80年が経とうとしている日本社会は、さまざまなトランジションの必要性に直面しています。世界全体で取り組まなければならないトランジションもあれば、読者のみなさんの身近な地域や組織で取り組むべきトランジションもあります。そして2050年以降、私たちの子ども、孫、さらなる子孫が豊かな生活を享受するためには、できるだけ早く、私たちの手で、よりよい社会へのトランジションを加速させておかなければならないのです。

後半では、トランジション・マネジメントの具体的な進め方と、オランダの先進的な事例を紹介します。最後に、トランジションを今日から加速させていくためになにができるのか、考えたいと思います。

「世の中なにかおかしいぞ」「仕組みから変えないといけないぞ」と考えたことのある人は、ぜひトランジション・マネジメントを応用して、新しい行動を起こしてみたり、いまおこなっている活動を見なおしてみたりしてください。

トランジションは、ものすごい大人数（もしかしたら地球上すべての人々！）の行動・思考を変えたことでもあるので、一朝一夕にかたづく問題ではありません。私自身の実践でも、なかなか思ったとおりにならず、日々悩み続けています。それでも、未来のためにトランジションが必要だと、理論的に確認できているので、挫折しながらも実践を続けることができます。千里の道も一歩から。どうか臆することなく、読み進めてみてください。

はじめに ..... 3

第 1 章

# 現代社会の諸問題

化石燃料で成り立つ社会 ..... 16

産業革命と人新世／大都市の発生

死亡率の劇的減少／化石燃料・内燃機関への依存

持続可能性の必要性 ..... 25

想定外の外部不経済／規制による外部不経済の抑えこみ

気候変動の原因は産業革命以降のシステムそのもの

サステナビリティの必要性

気候変動対策の行き詰まり ..... 34

欧州の「過激」な社会運動／コツコツ省エネしても解決しない  
抵抗勢力との対立は不可避

## 日本の人口問題

どうにも止まらない少子高齢化・人口減少／人口減少の現場  
人口増加が前提の日本の仕組み／「移民」も仕組みを変える  
経済の冷え込みを前提にした仕組みの転換／「高齢者」の定義のアップデート

### コラム① 気候変動と地政学リスク

## 第2章

# トランジションの可能性

どうして社会の仕組みを変える必要があるのか？……………58

大規模で長期にわたる課題／社会を抜本的に変えるための「力」  
低確率高ハザードのリスク／先延ばし症候群

社会とは「システム」である……………66

大きなピタゴラ装置／アンバランスなシステムは崩壊する

マルチ・レベル・パス・スペクティブ（MLP）……………71

構造とエージェント／3層構造のMLP／「トランジション」の定義  
構造とエージェントの相思相愛関係／ふたつのカーブ…SとX

トランジションの加速でシステムを変える……………82

日常の習慣を入れ替える／対立は避けられない

未来のあたりまえを先取りする……………87

先取りした者が勝つ？／ステークホルダーは変化を嫌う

コラム② コオロギ炎上……………92

第3章

# トランジション・マネジメントのステップ

## トランジション・マネジメントとは？

トランジションを加速させる

「上から目線の押しつけ」ではなく、「実践を伴った勧誘」を身近なこともトランジション・マネジメントの対象

トランジション・マネジメント向きの問題とは

96

## ステージ① 問題を定義する

フェーズ① 「規模」を決める

フェーズ② 「テーマ」を決める

フェーズ③ 目標年次を決める

104

## ステージ② 計画をたてる

フェーズ④ Xカーブを作成する

フェーズ⑤ 未来の姿を決める

フェーズ⑥ フロントランナーを見つける

110

ステージ③ 仲間を集める ..... 117

フェーズ⑦ 「トランジション・アリーナ」を開く

フェーズ⑧ 未来のビジョンを共有する

フェーズ⑨ フロントランナーたちの考えをまとめる

ステージ④ 実行する ..... 124

フェーズ⑩ 「参加疲れ」を回避する

フェーズ⑪ フロントランナーの「推し活」をする

フェーズ⑫ (場合によっては)新しい活動をはじめ

フェーズ⑬ とにかく続ける

フェーズ⑭ ときどき見直す

コラム③ トランジションとトランスフォーメーション ..... 135

第4章

トランジション先進国・オランダ

トランジション都市・ロッテルダム……………138

悲劇の都市から、世界の最先端へ／「シティ・ラウンジ」計画

ケース① モビリティ・トランジション・アリーナ……………143

異例の自動車依存都市／モビリティ・アリーナの発足／そして実践へ

自転車プラットフォーム／ハッピー・ストリート

トランジション・マネジメントの成果

ケース② M4H地区……………160

旧港湾地区の再開発／辺縁で創造する

M4Hでのさまざまな実践／都市の多様性

国際建築ビエンナーレ

〈特別インタビュー〉

オランダ・トランジション研究所（DRIFT）代表

ダーク・ローバツク……………173

コラム④ 人新世……………183

## 第5章

## 今日からはじめるトランジション

未来への希望としてのトランジション	186
思考の転換／冷笑主義は相手にする価値なし／公正なトランジションという配慮	
日本でトランジションを起こすには	193
日本に根付く「不信」の伝統／「ナッジ」というトロイの木馬	
小さくはじめて、大きく実らせる	198
外部性／コロナ禍で身近になったトランジション	
日本の身の回りにあるトランジション	203
マイカーの電動化／電力とエネルギー／民主主義	
いまからはじめられるトランジション	
コラム⑤ 3・5パーセントで世界は変わる？	216
おわりに	219
社会の「あたりまえ」を変えるためのブックガイド	223

第  
1  
章

現代社会の諸問題



# 化石燃料で成り立つ社会

## 産業革命と人新世

突然ですが、あなたはいま、何歳ですか？

10代の方もいらつしやるでしょうし、もしかしたら100歳以上の方もいらつしやるかもしれません。

では、これまでのあなたの人生のなかで、社会が大きく変わったことって、なにか思いつきますか？

ご高齢の方であれば、太平洋戦争や高度経済成長などたくさんの変化を経験されてきたことでしょう。50歳前後の方であればパソコンやインターネットの普及、30歳前後の方であればスマートフォンなどの普及などでしょうか。10代だとまだ、これといって大きな変化は経験してないかもしれませんがね（でも大丈夫、これから嫌というほど経験するはずですよ）。

人間、長いこと生きていれば、社会の大きな変化をいくつか体験することでしょう。しかしいま生きている、私たち誰もがほとんど意識していない社会の大変化が、250年ほど前に英

国からはじまりました。それが産業革命です。当時の英国では、石炭の存在、科学の急速な発展、土地法制の変化など、さまざまな条件が揃ったことから、これまでの人類の歴史のなかで何回目かの抜本的な大変化が実現しました。この大変化が英国からヨーロッパ大陸、新大陸、そして世界へと伝播していったことで、この地球上のほぼすべての人間社会に新しい秩序がもたらされたのです。

この産業革命以降の世界を「**人新世**」(Anthropocene)と呼ぶことを、地球科学などの研究者たちが最近、提案しています。もともと、「**世**」とは、地球の46億年の歴史を、地質の研究などに基づいて時代区分するために用いられる単位で、いちばん新しい「**世**」は、約1万年前から現在に続く完新世でした。しかし、産業革命以降の人類社会が地球の仕組みにあまりに大きな影響を与え、地球がこれまでとは異なる様相を見せはじめたので、新しい「**人新世**」がはじまったというのです。では産業革命で、どのような変化が生じたのでしょうか。いくつか具体例をみてみましょう。

## 大都市の発生

コロナ禍で少し変化がみられるようですが、「東京一極集中」と言われるような、多くの国民が大都市へと引き寄せられる現象は、明治時代からずっと続いてきました。じつは、これは

日本特有の現象ではなく、世界中どここの国でも起きている現象です。仕事や娯楽を求めて首都や大都市へと人口が移動するのは、考えてみればあたりまえのことです。とくに最近では、アジアやアフリカ諸国で大都市に人々が集まり過ぎて、スラムなどのきわめて劣悪な住環境での生活を余儀なくさせられる人々が問題になっています。

こうした「大都市」というものは、じつは産業革命以降に生まれたものです。それ以前の多くの人々は、地方部で農林水産業に従事していました。しかし、産業革命によって農業技術が格段に進化したことから、田園部で必要な労働力が余るようになり、逆に都市部の工場や炭鉱などでは労働力がより必要とされるようになりました。さらに、産業革命の発祥の地だった英国では、土地の個人所有に関するルールが明確になり、囲い込み運動（エンクロージャー）によって、それまで共同利用されてきた土地が使えなくなりました。その結果、一部の農民が都市に移動せざるをえませんでした。これらの結果として、世界的な規模で多くの人々が都市部に「密に」住まうようになったのです。

産業革命以前、世界でもっとも人口の多い大都市はどこだったか、知っていますか？ それは、中国の北京やタイのアユタヤ（バンコク）でした<sup>[※1]</sup>。それでは、当時の北京やアユタヤの人口は何人だったと思いますか？ ちなみに、現在の東京都市には約1400万人が住んでいま

す<sup>[※2]</sup>。

[※1] From Jericho to Tokyo: the world's largest cities through history – mapped <https://www.theguardian.com/cities/2016/dec/06/world-largest-cities-mapped-through-history-data-viz>

答えは、せいぜい100万人程度、つまり世界一の大都市でも、いまの東京都の14分の1の人口だったのです。それが産業革命によってさらなる大都市が可能になり、ロンドンが200万人を超える巨大都市へと急成長したほか、リーズやリバプールなど、英国内の他の工業都市への人口集中も急激に進んだのでした。

産業革命による都市部の人口爆発は、思わぬ弊害をもたらしました。ロンドンでは、地方出身の単純労働に従事する人々が住まうスラムがうまれ、上下水道もない狭い部屋に何人もが寝泊まりするような状況となりました。下水道がないので、し尿が道路に投げ捨てられていたそうです。その結果、コレラをはじめとする疫病がまん延し、結果として政府が「都市計画」をはじめることになります。住宅に窓をつけて換気をよくすることなどを義務づけたり、汚水を隔離するため下水道を整備したり、都市のインフラ（基盤的施設）整備を政府が担うようになりました。

現在では、都市は非常に複雑な仕掛けの上で成り立っています。たとえば電気、ガス、水道といった、いわゆるライフラインが、都市の地下には縦横無尽に張りめぐらされていて、一本の配管が管理されています。地上では、人々が電車や自動車で安全に移動できるよう、線路や道路もきちんと管理され、また修繕もされています。高層ビルも、安心してあつという間に昇れるエレベーターがメンテナンスされていますし、制振装置という巨大なおもりで地震の

揺れを抑え込んだりもしています。このように都市は、複雑に入り組んだ巨大システムが何事もなく、毎日、安全に稼働することによって初めて成立しています。

現在のこうした都市のありかたも、産業革命による人口集中がもたらしたのです。

## 死亡率の劇的減少

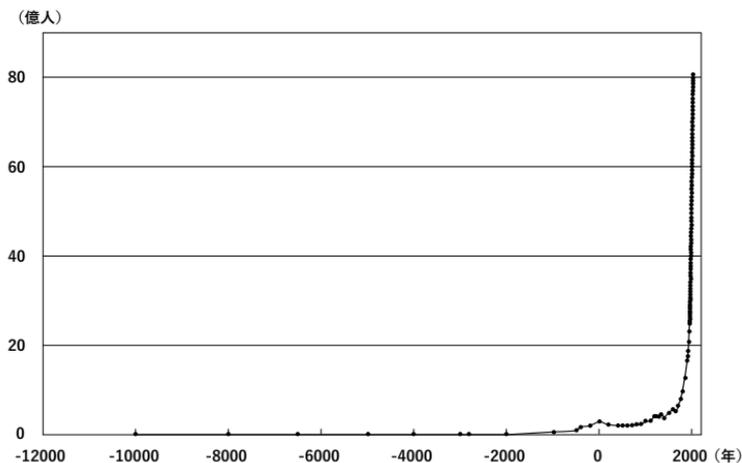
産業革命以降、世界の人口は急激に増加の一途をたどります。その理由には諸説あり、都市化によって若者が自由を得たため子どもをより多くつくるようになったとか、医学の発展により新生児や幼児の死亡率が急激に低下したと言われています（なお第二次大戦後には、高齢者の死亡率も減少したことさらに人口増加が続きます）。

日本のデータですが、明治時代には乳児の死亡率は15%程度でした。つまり1000人に15人の赤ちゃんが、1歳になる前に亡くなってしまっていたのです。それが戦後1950年代には4%程度、2021年には0・17%にまで、大幅に改善しました<sup>〔※3〕</sup>。結果として、無事成長できる子どもたちが増えたため、人口が増加をはじめたようになつたわけです。世界の人口について超長期のデータを見ると、つい最近まで地球上に1億人も存在しなかったのが、1800年代に入って10億人を突破し、その後はほぼ「垂直」のような勢いで増加していることがわかります（図1）<sup>〔※4〕</sup>。

〔※3〕厚生労働省「令和3年(2021)人口動態統計(確定数)の概況」 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei21/index.html>

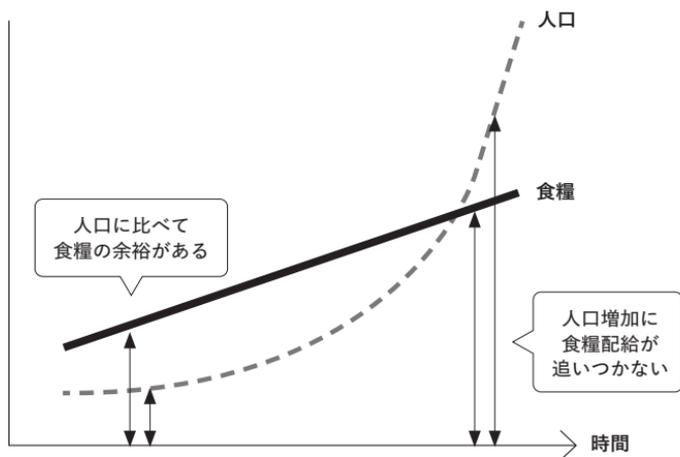
〔※4〕UN DESA (2022) "2022 Revision of World Population Prospects" World Population Prospects - Population Division - United Nations

図1 世界人口の推移



もちろん亡くなる子どもが減ることはよいことに決まっていますが、人口が増えれば、それだけ雇用や食糧を増やす必要があります。マルサスという18世紀の経済学者は、放っておけば人口は幾何級数的に増加するけれども、食糧生産は線形でしか増加しないので、必ずや食糧不足が深刻化するといひ、人口の抑制を主張しました(図2)〔※5〕。実際、中華人民共和国では最近まで「一人っ子政策」がおこなわれていました。幸い、化学肥料の発明による農業の生産性向上や、出生率の低下などもあり、日本を含む先進国では、食糧不足はそこまで深刻な問題ではありません。しかし、アフリカなどの最貧国では、いまだ栄養不足が深刻な問題ですし、世界全体で考えればまだまだ、人口増加と食糧不足という問題は解

図2 マルサスによる人口増加の問題



消されていません。

たしかに日本では出生率の低下が進み、他の先進国のような移民の受け入れがほとんどないことから、人口減少がはじまっています。しかし、世界全体で見れば、まだまだ人口は増え続けています。地球には開発されていない土地がたくさんあるので、人間の住む場所がなくなることはないでしょう。それでも、人口が増えるだけ、食糧生産や住居のために土地が必要になり、手つかずの自然を人間が開発していかざるをえないでしょう。

### 化石燃料・内燃機関への依存

産業革命のいちばんの大きな変化は「化石燃料」に依存した社会の発生です。石炭や石油といった化石燃料の存在はるか昔から知

られてはいましたが、いまに比べて、使い道はあまりありませんでした。それまでは、薪や木炭といった木質燃料が主に使われてきました。

それが、蒸気機関が産業機械の動力として実用化されたことで、石炭や石油を大量に消費する社会へと変化したのです。これまで人間や馬・牛、あるいは風などの力で細々と動かしていたものを、石炭や石油を燃やして水を蒸発させ、蒸気のパワーを生み出すことで、巨大な機械を動かせるようになりました。さらに人やモノも、蒸気機関車や蒸気船などで、いっぺんに大量輸送することが可能になったのです。

現代の工場では、石炭を焚いて蒸気機関を動かすということはほとんどなくなり、その代わりに電力で機械を動かすようになりました。しかし、その電力は、発電所で石炭や石油を燃やして沸かした蒸気でタービンを回転させて生み出しているのですから、その本質は変わりません。また戦後は、自動車や飛行機による移動が増えたことで、ガソリンなどを直接燃焼するエンジン（内燃機関）が身近な存在となりました。この変化は木や草に依存する「有機物依存経済」から石炭や石油に依存する「鉱物依存経済」への抜本的な転換となりました<sup>※6</sup>。

このように、産業革命以降の社会は、化石燃料に依存することで成長を続けてきましたし、もはや化石燃料がなくてはならない社会となってしまうのです。もし、いまこの瞬間、化石燃料が突然この世から消えてしまったら、どんな世界になるでしょうか？ 大半の家庭やオフ

イス、工場の電気は止まるでしょう。電気が止まればインターネットなどまったく機能しません。トラックも動かなくなるので、宅配の荷物も届かないし、スーパーの棚からモノがなくなるでしょう。石油を原材料とするプラスチックもなくなってしまいますので、身の回りのプラスチックを使った製品の買い替えは難しくなります。

このように、産業革命から200年以上経った現代の社会は、化石燃料を前提として成り立っています。化石燃料がなくなってしまうたら、社会そのものが成り立たなくなるほど、私たちは化石燃料に依存しているのです。

**トランジション 社会の「あたりまえ」を変える方法**  
**松浦正浩・著**

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定 価：1,980 円（10%税込）  
発売日：2023 年 7 月 26 日  
I S B N：978-4-7976-7433-0

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)